巻　頭　言

長崎短期大学　学長
安部　恵美子

今、大学教育の質の保証に関する論議が深まっています。教育の点検・評価を行う大学に求められる説明責任（アカンタビリティ）の要素に、「教育」と「研究」があります。大学（短期大学）運営の望ましい姿として、両者は決して、二律相反するものではなく、相互補完の関係にあるものと位置づけられます。

短期大学の教員の日常は、四年制大学の教員と比較すると、その教育課程の特性や学生の資質を反映して、授業や学生指導などの「教育」活動にウエイトが置かれがちですが、忙しい授業や学務の間を縫って、教員が、自らの専門領域に関する「研究」活動を継続していく姿勢を持つことは、短期大学教育の質を担保する上で大切なことです。

すなわち、学び続ける主体としてのモデルを教員が学生に示すことは、大学教育の目的である、自ら学ぶ姿勢の確立を促すものです。大学は、学生と教員が相互に学びあう場なのです。

また、短期大学の教育を充実させるためには、学内外で教員の手による多彩で活発な研究を行い、その成果を学生や同僚の本学教員、関連分野の研究者集団、さらには地域のステークホルダーに広く公開し、当該研究に対する理解を求め、関係者からの指導や批評を真摯に受け止めることが必要です。それは、高等教育に携わる者としての使命であると思います。

今回とりまとめた、本研究紀要に掲載されたどの論文にも、執筆担当教員の研究に対する篤い思いが込められているように感じます。昨年度（18年度）から実施した「研究費傾斜配分制度」の成果も報告されています。

各教員が、ここに積み上げた研究業績に対し、学長として敬意を表すると共に、その成果が学生の教育に還元されることを心から期待します。

最後になりましたが、なかなかはかどらぬ原稿の集約状況に心を砕きながら、編集作業に携わっていただいた紀要編集委員諸氏のご尽力に感謝申し上げます。

平成20年3月　　学長　安部恵美子